

芦屋大学論叢 第75号  
(令和3年7月27日)抜刷

《実践報告》

オンデマンドによるピアノ実技指導の試み

—LMS「Pholly」を用いて—

石田 愛子・稲葉 修子・岩崎 智早  
柿本久美子・野尻 智子・三宅 澄子



## 《実践報告》

### オンデマンドによるピアノ実技指導の試み

—LMS「Pholly」を用いて—

石田 愛子・稲葉 修子・岩崎 智早  
柿本久美子・野尻 智子・三宅 澄子

#### 1. はじめに

2020年度、新型コロナウイルス感染拡大防止を最優先に、全国の教育機関が授業形態の変更を迫られる中、芦屋大学（以下、本学）においても急遽、LMS（Learning Management System）「Pholly」<sup>1)</sup>を用いたオンデマンド授業が導入されることになった。感染拡大防止策の基本は「密閉・密集・密接のいわゆる三密を徹底的に避けること」とされ、ピアノの個別指導は「密集」にはあたらないが、狭小で窓のないピアノレッスン室での対面指導は「密閉・密接」に該当する。換気の良い広いレッスン会場を複数確保することも、同時双方向型のオンラインレッスン環境を整備することも困難な状況で、従来の対面指導に代わる方法を検討した結果、ピアノ実技科目「器楽」も動画のやりとりによるオンデマンドレッスンでの対応を模索することになった。従来の対面レッスンであっても、対象が1年生か2年生以上か、ピアノ初心者か経験者か、などにより指導の方法やその効果は異なってくる。オンデマンドレッスンでどこまで多様な学生に対応できるか、試行錯誤が始まった。2020年度前期については、期末試験と直前の対面レッスンを除き、全てオンデマンドでの対応、後期については、感染拡大状況がやや改善したことで窓のある広いレッスン会場を3か所確保できるようになったことから、隔週での対面レッスンとオンデマンドの併用とした。本稿では、2020年度前後期に実施したオンデマンドによるピアノレッスンの効果と問題点、新しいレッスン形態としての可能性について述べる。

#### 2. レッスン計画と課題曲の設定

「器楽」は本学教職課程および保育士課程の必修科目である<sup>2)</sup>。学生は、取得希望免許・資格に応じて1年次から半期ごとに器楽Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの順に履修する。各期の到達目標、使用テキスト、課題と評価方法について共通理解した複数教員が、それぞれのクラスの学生の個人レッスンを行っている。ピアノ実技は大学入学までの学習経験の有無によりスタート時点での差が大きいため、個々に適した指導が必要になる。各教員が最短でも半期間、一人一人のペースとレベルに応じた課題を与え、初心者でも最低限の到達目標をクリアできるよう指導に努めている<sup>3)</sup>。

今回、全学的に導入されたLMS（Learning Management System）「Pholly」（以下、Pholly）は、各科目の担当教員が授業内容とレポート課題を授業毎に配信し、学生は指定の期日までにレポート等を提出、教員が提出物の評価やコメントをフィードバックする、というものである。教員からの「お知らせ」や、教員と

学生双方向の「メッセージ」機能も備えている。講義系科目の場合、教員が授業内容のスライド資料や動画を掲載し、学生はそれらを視聴したうえでレポートを提出するが、「器楽」は学生のレベルに応じた個別指導のため、一律の授業動画では対応できない。従来の対面指導では、各期所定の選択課題曲一覧の中から、学生のレベルとペースに応じて毎回の課題曲を個別に指定していた。習得の早い学生は次々と課題をこなしていく一方、学習ペースの緩やかな学生には1曲の課題に数回のレッスンを費やすこともあった。週一回動画を配信するオンデマンドレッスンでは、学生一人一人に合わせて動画を作成することは難しいが、レベルや学習ペースが異なる学生にできるだけ対応するため、1年生対象の器楽Ⅰ・Ⅱについては3段階のレベルのコース別課題を複数曲、2年生対象の器楽Ⅲ・Ⅳについては必修と選択の弾き歌い課題2曲を、それぞれ「本日の課題曲」として毎回出題することにした。いずれも複数の課題曲を示すことにより、個々のレベルや学習ペースにより練習する曲数を調節することができる。器楽Ⅰ・Ⅱの3段階のレベル別コースは表1のとおりである。また、「本日の課題曲」の具体例として、器楽Ⅰを表2、器楽Ⅲを表3に示す。

表1 器楽Ⅰ・Ⅱのレベル別コース設定

科目	コース	対象	課題曲のレベル
器楽Ⅰ	ビギナー	全くの初心者	バイエル No.1～50 相当
	ベーシック	初級	バイエル No.46～66 相当
	ベーシックプラス	初級上	バイエル No.65～96 相当
器楽Ⅱ	ベーシック	器楽Ⅰでビギナーコースを修了	—
	ベーシックプラス	器楽Ⅰでベーシックコースを修了	—
	アドバンス	器楽Ⅰでベーシックプラスコースを修了	バイエル終了～ツェルニー

表2 器楽Ⅰ「本日の課題曲」例<sup>4)</sup>

	コース	課題曲 No.	伴奏づけ、弾き歌い
Lesson 5	ビギナー	17, 19	がっきあそび
	ベーシック	48 (へ長調に移調)	かっこう (へ長調)
	ベーシックプラス	63, へ長調のスケール	ブンブンブン

表3 器楽Ⅲ「本日の課題曲」例<sup>5)</sup>

	内容	必修課題	選択課題
Lesson 5	一日の歌	おかえりのうた	さよならのうた

### 3. レッスン動画の作成

対面指導であれば口頭で説明できることをオンデマンドでは視聴覚教材として示す必要がある。毎回配信するスライド資料と動画については、「器楽」担当教員で分担して作成した。「器楽Ⅰ」と「器楽Ⅲ」のスライド資料および動画の概要と作成上の留意点は次のとおりである。

### 3.1 スライド資料「課題と解説」

教職課程や保育士課程のピアノレッスンにおいては、将来にわたって自立的に学び続けるために必要となる音楽の基礎知識と、正しい練習方法を身につけさせることが重要である。スライド資料「課題と解説」には、各曲について読譜のポイントと練習方法のアドバイスを掲載した。特に初心者は、楽譜を読むことに苦手意識を持つケースが少なくないため、読譜の際は①まず調性と拍子を確認すること、②一音一音を読むのではなく、フレーズの単位でとらえること、③曲の形式をとらえ、類似の音型に気づくこと、が効率的であることを強調した。また、指使いについては、特に初期段階において「正しい指使いで弾くことを習慣づける」ことが肝要であるが、フレーズや形式の意識は、最適な指使いを考えるヒントにもなる。指定された指使いを厳守する必要がある場合や、特に注意を要する曲については、その必要性や効果を併記するようにした。弾き歌いが中心となる「器楽Ⅲ」では、和音記号とともにコードネームについて知識の定着をはかり、歌詞や曲想によるアーティキュレーションの変化、ブレスとフレージングの関連についても説明した。また、保育の場面を想定した言葉かけや表現の工夫など、実践的なアドバイスも盛り込むようにした。

### 3.2 「器楽Ⅰ」模範演奏動画

#### 3.2.1 ビギナーコース

ビギナーコースの対象となるのは、ピアノについて全くの初心者であり、これまでピアノに触れたこともない学生、楽器をまだ所有していない学生も想定している。『2訂版 歌唱教材伴奏法 バイエルとツェルニーによる』（以下、『歌唱教材伴奏法』）より No.1, 5, 6, 8, 17, 19, 20, 21, 25, 28, 29 と、伴奏付け・弾き歌い練習として《かつこう》《ちょうちょう》《あの雲のように》《がっきあそび》《しりとり》を課題とした。

動画の作成にあたっては、予め台本を作成し、必要事項を効率的に言葉で伝えながら演奏できるようにした。まずは楽器の説明、鍵盤の位置等、スライド資料（課題と解説）に書かれている内容を視覚的に確認できるよう動画でも説明した。説明する際の言葉遣い、発声、声量、速度に留意するとともに、初心者に分かりやすいテンポで演奏するよう配慮した。今回、ビギナーコースの動画撮影にはアコースティックピアノではなく、あえて電子ピアノを採用した。学生の所有楽器としては電子ピアノのほうが普及率が高く、メトロノーム機能を使った練習方法を紹介するなど、電子ピアノの機能を活用する方法も提示することができたと考える。ピアノの練習方針として、左手からの練習（伴奏、ベース音から）を推奨した。初心者の大半は、左手の指を単独で動かすことに慣れていないこと、また、ハーモニーの響きを感じながらその後右手のメロディーをのせることができることから、左手のみ→右手のみ→両手弾きの順番で練習を進めた結果、左手の動きが安定し、曲の仕上がりが早く正確になる効果が多くの学生に認められた。

#### 3.2.2 ベーシックコース

ベーシックコースの対象となるのは、大学入学までにピアノ学習経験があり、ト音記号、ヘ音記号、音符の長さを理解し、ハ長調の主要三和音を中心とした平易なリズムの曲なら両手奏できる学生である。ピアノ学習経験がまだ浅い学生や、幼少期以来ブランクの長い学生も想定している。『歌唱教材伴奏法』より No.28, 30, 36, 48, 49, 50, 51 と、伴奏付け・弾き歌い練習として《さよなら》《メリーさんのひつじ》《かつこう》《バスバスはしる》を課題とした。これらの課題曲は、ト長調やヘ長調への移調奏、ト長調・ヘ長調の主要三和音の理解、その主要三和音を用いた伴奏付けおよび弾き歌い、8分の6拍子などの要素を含んでいる。各曲の指導のポイントを明確にし、No.28 ではアルベルティバスの動きを、No.30 では強弱を

主とした。No.36では初めてのト長調なので調号のファの井の位置が分かるように、最初にファの音、次にファの井の音を撮影し、左手の三和音についても調号を忘れないように説明を加えた。No.48のリズムは「《ぞうさん》のリズム」として覚えさせた。また初めて出てくるへ長調はシにbがつくことや、ト長調やへ長調への移調の説明をしてから演奏した。No.49ではフレーズや動きのかたまりを捉えさせるように右手も左手も2小節単位の動きで、No.50では4小節ごとに区切り、曲の形式(a-b-c-a-b')について説明したのち、片手ずつ、また両手で演奏した。No.51では8分の6拍子の説明に4分の3拍子との違いを伝えるため、8分音符3個くくりと2個くくりを図式化したカードを取り入れた(図1)。伴奏付けについては、まず右手メロディーと、使用する和音だけを弾き、その後両手奏(和音伴奏→アルベルティバス等へのアレンジ)→弾き歌い、と段階を踏んで進めた。

撮影にあたっては、ピアノ鍵盤で1点ハ音のポジションと左手のへ音記号のポジションが理解できるように、できるだけ真上から両手が写るように、また指の動きが見えやすいように設定した。まず調性、拍子、用語など全体の説明をしてから片手ずつの説明をし、片手ずつゆっくり弾く。難しいリズムは取り出して説明をしながら弾く。学生が繰り返し見ながら練習しやすいよう、4小節を基本に片手ずつ演奏した。また、ピンポイントで伝わるよう「ここからです」「この音です」など弾きながら説明し、初級レベルの学生が一人でも練習できる動画となるよう配慮した。

### 3.2.3 ベーシックプラスコース

ベーシックプラスコースの対象となるのは、大学入学までにピアノ学習経験があり、音楽の基礎知識を備え、バイエル中盤以降の曲を演奏できる学生である。『歌唱教材伴奏法』よりNo.57, 61, 63, 69, 72, 73, ハ長調・ト長調・へ長調のスケールと、伴奏付け・弾き歌い練習として《ロンドン橋》《ちょうちょう》《きらきら星》《ブンブン》《森のくまさん》を課題とした。

動画撮影にあたっては、三脚を用いて画面がぶれないように、また鍵盤がよく見えるようにアングルを決定した。また、タイマーを利用して、動画が長くなりすぎないように留意した。動画では、まず曲全体について簡単に説明した後、細かい曲想や特に注意すべきポイントを説明。視聴している学生がはっきりわかるように、何小節目の説明かを言ってから弾く、または弾きながら同時に曲想についての説明をし、ダイレクトに伝わるよう配慮した。そして最後に模範演奏として最初から最後まで通して弾く。例えば《ちょうちょう》の伴奏付けでは、まず左手は和音だけで弾けるようになることが耳からの記憶と鍵盤の位置の定着による効果で、形を変えても自然に弾くことができるようになるので、和音伴奏→三連符にアレンジした伴奏、の順に模範演奏した。また、No.73は単位認定課題曲として特に詳しく説明した。複付点四分音符と付点四分音符の違いを弾きながら説明したほか、メゾスタッカートとスタッカートの違いをわかるように示した。

### 3.3 「器楽Ⅲ」の模範演奏動画

器楽Ⅲは、器楽Ⅰ・Ⅱの単位を修得済みで、幼稚園教員免許状・保育士資格取得希望者が主な対象となる。ピアノ技術の更なる向上と併せ、保育実習や教育実習を想定した、童謡・歌唱教材の弾き歌いが重要となる。器楽Ⅲの内容と課題曲は次のとおりである。

- ① カデンツ、和音記号、コードネーム／むすんでひらいて
- ② へ長調とト長調／きらきら星、うみ
- ③ いろいろな伴奏形／手をたたきましょう、春がきた

- ④ 生活の歌／おべんとう，朝のうた
- ⑤ 一日の歌／おかえりのうた，さよならのうた
- ⑥ マーチ／小犬のマーチ，子どもの世界
- ⑦ 夏の歌／たなばたさま，おばけなんてないさ
- ⑧ ニ長調の曲／あくしゅでこんにちは，おつかいありさん
- ⑨ アーティキュレーション，強弱，速度等の記号／シャボン玉，とけいのうた
- ⑩ 誘導を伴う歌／幸せなら手をたたこう，アイアイ

動画作成にあたっては，例えば《きらきら星》ではポジションを移動させると雰囲気が変わることを伝えるため，鍵盤全体が写るように，また，《たなばたさま》ではダンパーペダルの使用を推奨するため，足元が写るように，カメラの設置位置やアングルを工夫した。録画の回を重ねる中で，話すトーンを変えてみたり，リズムカード（図2）や打楽器を使用したりして，「目と耳を開く」指導に発展させていくことができたと考える。

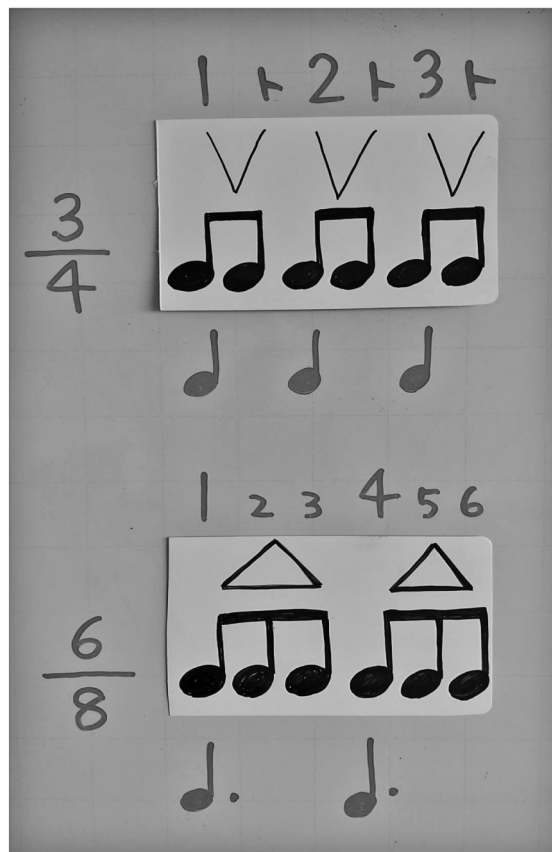


図1 4分の3拍子と8分の6拍子のちがい

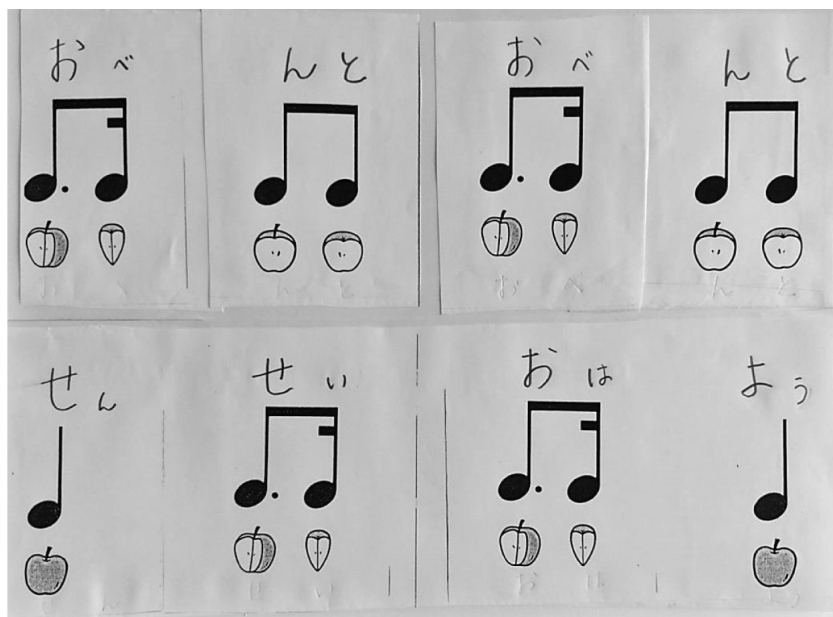


図2 《おべんとう》と《朝のうた》のリズムパターン  
 (音符とイラストは「藤原亜津子先生のリズムカード」より引用)

#### 4. 実践と経過

Pholly を用いたオンデマンドレッスンの手順は次のとおりである。

- ① 毎週、授業開始時刻に「本日の課題曲」を公開。各課題曲についての解説および練習のポイントを掲載したスライド資料と、各曲の模範演奏動画を配信。
- ② 学生は課題曲とその解説および練習のポイントを確認し、動画を視聴して練習する。次回授業日までの一週間の練習状況と課題曲についての自己評価をレポートとして提出。また、適宜、自己ベストの演奏動画を自撮りして提出。
- ③ 教員は提出されたレポートにより練習の進捗状況を確認し、質問があれば回答。また動画を確認し、演奏上のアドバイスをコメントする。提出が滞りがちな学生には激励のメッセージを送り、提出を促す。

Pholly によるレッスンを開始した当初は、教員・学生の双方がその操作に戸惑い、特に動画の提出と確認については様々な問題が生じた。例えば、①動画は短いものでも情報量が大きく、圧縮または分割しないと提出できない、②動画の型式が多様で、教員側で再生できないものがある、③楽器を持っていない学生が紙鍵盤のようなアプリで演奏していて、到達度を確認できない、などである。その後の全学的なサポートにより、動画の提出方法については「学生掲示板サイト」を通して学生への指導が行われ、動画の再生についても改善されて、動画のやりとりに関する問題は解消された。楽器を持っていない学生に対しては、大学のピアノレッスン室の利用と楽器の購入を推奨するなどの指導を行い、その後は鍵盤楽器による演奏動画が出揃うようになった。

動画の提出や受理はスムーズに行えるようになったが、質問や回答、アドバイスを文章化する作業は教員・学生双方にとって非常に手間のかかることであった。特に顔も知らない1年生に対して、文字だけのやり



とりは甚だ心もとないものであった。2020年7月になって感染拡大状況がやや改善したことから、実技・実習系科目の対面授業が一部認められることになり、単位認定課題曲のレッスンが実現した。1年生とようやく顔を合わせることができ、文字だけのやりとりでも相手の顔を思い浮かべることができるかどうか、その差は大きいことが実感された。試験については、対面試験と、自己ベストの最終動画提出の2本立てで実施し、総合評価とした。

前期終了後、授業の形態について様々な角度から検討を重ね、感染拡大防止策を徹底できるレッスン会場を学内に3カ所確保し、後期からは隔週の対面レッスンとPhollyを併用することになった。健康上または家庭の事情により登学できない学生については、引き続きPhollyで対応した。コロナの状況や気象警報発令など不測の事態を考慮し、対面レッスン予備日も設けながら、後期は期末試験まで計画どおり、ほぼ隔週の対面レッスンと対面試験を実施することができた。

## 5. アンケート結果と考察

「器楽」では毎年、前期・後期の授業終了後、履修学生を対象とした「自己評価アンケート」を実施し、レッスン方法や課題の改善に役立っている。ピアノ実技に関する到達度についての質問を主な内容としているが、2020年度についてはPhollyのアンケート機能を利用し、レッスン形態の変化に関する意識調査も同時に行なった。

### 5.1 2020年度前期終了時

#### 5.1.1 学生の自己評価

「ピアノの練習について、自分なりに努力したと思うか」「自分なりにピアノは上達したと思うか」という設問に対する1年生（40名）と2年生以上（21名）の回答を表4および表5に示す。

表4 「ピアノの練習について、自分なりに努力したと思うか」

	器楽Ⅰ（1年生）	器楽Ⅲ（2年生以上）
とてもそう思う	19（47.5%）	4（19%）
そう思う	13（32.5%）	15（71.4%）
あまりそう思わない	3（7.5%）	0（0%）
全くそう思わない	3（7.5%）	0（0%）
どちらともいえない	2（5%）	2（9.5%）

表5 「自分なりにピアノは上達したと思うか」

	器楽Ⅰ（1年生）	器楽Ⅲ（2年生以上）
とてもそう思う	10（25%）	5（23.8%）
そう思う	19（47.5%）	11（52.3%）
あまりそう思わない	1（2.5%）	0（0%）
全くそう思わない	4（10%）	0（0%）
どちらともいえない	6（15%）	5（23.8%）

1年生・2年生ともに7割以上の学生が「ピアノが上達した」と自己評価している。一方、自己評価の低い学生、「あまりそう思わない」や「全くそう思わない」を選択している学生が2年生以上にはいないのに対し、1年生では12～15%と、1年生と2年生以上で顕著な差が表れている。例年、入学直後の「器楽Ⅰ」の出席状況は良好でリタイア率は低いが、2020年度前期については開始早々に提出が滞ったり、連絡がとれなくなったりする学生がみられた。2年生は、1年次のピアノ学習経験があり、担当教員との関係性も構築できたうえでオンデマンドレッスンに移行しているが、1年生はコロナ禍で友だちをつくる機会もなく、担当教員と直接顔合わせもできないままにオンデマンドレッスンとなり、何かわからないことがあったときに気軽に相談や情報交換ができる相手がいなかったことも、リタイアの大きな要因だったのではないかと推察される。

### 5.1.2 オンデマンドレッスンの効果

「オンデマンドによるピアノレッスンを通して、自分なりに進歩したと思うこと」についての1年生と2年生以上の回答を表6に示す。

表6 「オンデマンドによるピアノレッスンを通して、自分なりに進歩したと思うこと」(複数回答)

	器楽Ⅰ (1年生)	器楽Ⅲ (2年生以上)
ピアノを練習する習慣がついた	24	14
ピアノの練習のしかたが理解できた	19	9
自力で楽譜を読めるようになった	18	8
パソコンの操作に慣れた	13	5
期限を守るための計画性が身についた	11	11
文章を書く力がついた	4	3
自撮りが上手くなった	4	1
その他	1	2
該当なし	4	0

オンデマンド授業は時間に縛られない分、通常の授業以上に自主性・自律性が求められる。1・2年生とも6割以上が「ピアノを練習する習慣がついた」を、また半数近くが「ピアノの練習のしかたが理解できた」を選択していることから、ピアノの練習に主体的に取り組んだと感じている学生が多いことがうかがえる。計画性や文章力、パソコン操作については、「器楽」に限らず他の多くの科目のレポート課題をこなす中で身についたものと考えられる。模範演奏動画を視聴して練習するオンデマンドレッスンは、はたして読譜力が身につくのか、聞き覚えと動きの模倣だけで弾いてしまうのではないかと、という懸念があったが、特に1年生では半数近くの学生が「自力で楽譜を読めるようになった」を選択している。

### 5.1.3 動画提出の効果

「動画を撮ることは、どのような効果があったと思うか」という設問に対し、毎週弾き歌いの動画提出を課せられた2年生からは次のような回答があった。(自由記述)

- ・動画を撮ることで見返しをすることができ、自分でできていない部分を確認することができた。
- ・自分が納得いくまで動画を撮り続けたことで、いい感じに演奏できたと思うし、その分たくさん練習できた。
- ・自分がまだまだなところがわかる。
- ・自宅での練習の様子を見てもらえるので、動画を撮って送るのはとてもいいことだと思った。
- ・繰り返し聞き直すことができる点。いいところと悪いところがわかる点。

自宅に楽器がない、あるいは練習や録画ができる環境がない学生からは、「動画の提出に苦労したので対面レッスンがよい」との意見もあった。動画の場合は撮り直しができ、慣れた環境、慣れた楽器で演奏できるため、より緊張を強いられる対面試験よりも上出来であることが多いが、最終的には一発勝負の試験の場で実力を発揮できるように練習するのが本筋であろう。動画撮影は、練習のプロセスとしては非常に有効であると考えられる。

#### 5.1.4 対面レッスンの頻度

「オンデマンドと対面レッスンを併用するとしたら、対面レッスンはどのくらいの頻度であればよいと思うか」という設問に対して、「隔週」を希望する学生は1年生の47.5%、2年生の61.9%と、「毎週」を希望する学生（1年生22.5%、2年生9.5%）を大きく上回った。通学への不安感や、外出自粛の影響が大きいと考えられる。

### 5.2 2020年度後期終了時

#### 5.2.1 前期との比較

「後期、オンデマンドと対面レッスンの併用になったことで、前期と比べて変化があったか」という設問に対する1年生（40名）と2年生以上（23名）の回答を表7に示す。

表7 「後期、オンデマンドと対面レッスンの併用になったことで、前期と比べて変化があったか」（複数回答）

	器楽Ⅱ（1年生）	器楽Ⅳ（2年生以上）
ピアノの練習に意欲的に取り組めるようになった	24	8
ピアノについての不安が少なくなった	12	4
上達のはやくなったと感じた	15	4
直接質問できるので、レポートに質問を書くことが減った	13	6
自撮りした動画を提出する回数が減った	13	6
参考動画を見る回数が減った	7	4
その他	0	3
特になし	5	1

対面レッスンの併用は、学生の安心感や意欲の向上につながっている。特に1年生において、対面レッスンによる心理的な効果が顕著である。また、対面レッスンにより動画や文章のやりとりの手間が省けることを歓迎している様子もうかがえる。

### 5.2.2 対面レッスンの長所

「対面レッスンの長所と感じられること」についての1年生と2年生以上の回答を表8に示す。

表8 「対面レッスンの長所と感じられること」(複数回答)

	器楽Ⅱ (1年生)	器楽Ⅳ (2年生以上)
先生と会話ができること	29	11
先生に直接質問ができること	27	19
先生に目の前でお手本を弾いてもらえること	22	16
本物のピアノで弾けること	24	10
友だちができること	8	5

動画やレポート、メッセージによるコミュニケーションと異なり、対面レッスンはその場で直接、即対応できることが最大のメリットである。また、学生にとっては、グランドピアノならではの豊かな響き、電子ピアノやキーボードとは異なるタッチ感や音色を体感する機会でもある。

## 6. オンデマンドレッスンの効果と課題—今後に向けて

ほぼオンデマンドの前期と、オンデマンドと対面レッスン併用の後期を終えて、やはりピアノ実技指導においては対面レッスンの不可欠でありながら、オンデマンドならではの効果もあることが確認された。オンデマンドの効果としては、学生自身が計画的に練習するようになり、毎日の練習の積み重ねの大切さを認識できること、繰り返し動画を見て自習ができるので自立に繋がること、一回一回の対面レッスンの機会を大切に作る姿勢が生まれること、などが挙げられる。楽器の習得は本人の努力次第であり、自律的・主体的に学ぶ意欲・姿勢を持たせるうえで、オンデマンドレッスンには一定の効果があると考えられる。特に、動画撮影のために練習を重ね、動画で自らの演奏をチェックすることは、練習のプロセスとして非常に有効である。また、毎週課題曲を提示することにより、一定期間中に一定の曲数を練習させることができるので、学生が安易なマイペースに流れることを防ぐ効果もあったと考える。

しかし、対面でなければ指導が難しい点も数多い。何よりも学生の状況をリアルタイムに把握できないため、きめ細かい指導が困難で、誤った弾き方を修正できるのは一週間後、などというケースも起こり得る。特に、全くの初心者の場合、ピアノの鍵盤の位置や楽譜の読み方から指導する必要があり、オンデマンドでは「何をどう質問すればよいのかわからない」状態に陥り、早々に諦めてしまう可能性がある。前期リタイア学生の状況からも、特にビギナーコース対象者については初期段階の対面指導が非常に重要であることが指摘される。また、初級以上のレベルの学生に対しても、指の形や打鍵のしかた、身体の使い方、リズム感やテンポ感、音量や音色、キーボードや電子ピアノとアコースティックピアノのタッチ感や響きの違いなど、感覚的なことや細かいニュアンスを伝えるのは対面でなければ難しい。ピアノ実技指導において、実際に目の前で弾いて聞かせること、学生との直接的なコミュニケーションが重要であることは言うまでもない。

2021年5月現在でもコロナ禍は終息の兆しがなく、本学においても当分、オンデマンドと対面レッスンの併用が続くことが予想される。ウィズコロナの時代、感染防止対策を徹底したうえでの対面レッスンを補

完するものとして今後、同時双方向型のオンラインレッスンについても検討するとともに、レッスン動画のクオリティ向上についても、さらに研究を重ねていきたい。

## 注

- 1) Pholly (フォリー) は日本事務器株式会社のクラウド型授業支援システムである。
- 2) 本学で保育士資格、幼稚園教員免許状を取得希望の場合、器楽 I II III IV 必修。小学校教員免許状を取得希望の場合は器楽 I II が必修である。
- 3) 詳細は芦屋大学論叢第 69 号(2018) p.89-98 (石田愛子・稲葉修子・井上邦子・岩崎智早・柿本久美子・野尻智子・三宅澄子「学生の主体的な学びを支える指導ーピアノ個別指導の場合ー」) 参照。
- 4) 使用テキストは『2 訂版 歌唱教材伴奏法 バイエルとツェルニーによる』(教育芸術社)。
- 5) 使用テキストは『改訂 幼児のための音楽教育』(教育芸術社)。

## 参考文献・資料

- ・大学音楽教育研究グループ 編『2 訂版 歌唱教材伴奏法 バイエルとツェルニーによる』(教育芸術社) 2015 年.
- ・神原雅之・鈴木恵津子 編著『改訂 幼稚園教諭・保育士養成課程 幼児のための音楽教育』(教育芸術社) 2018 年.
- ・音楽教材「藤原亜津子先生のリズムカード」((有)ト音記号)
- ・高橋一雄『バイエルエキス ピアノの弾き方解説』(けやき出版) 2004 年.
- ・『楽譜 DVD でひける! はじめてのピアノえほん 1 たのしいピアノのおけいこ』(成美堂出版) 2013 年.
- ・黒河好子『黒河好子のピアノサプリ ピアノを弾くからだ 劇的に音が変わる! 指のトレーニング編 (DVD 付き)』(ヤマハ) 2014 年.

